

信太光郎 (教養学部言語文化学科)

シュティフターを読むハイデガー



略歴

- 1988年 秋田県立能代高等学校卒業
- 1994年 東京大学理学系研究科人類学専攻
修士課程修了
- 2009年 東北大学文学研究科文化科学専攻
博士後期3年課程修了
- 2013年 東北大学文学研究科助教
- 2014年 東北学院大学教養学部准教授

ハイデガー思想の研究に取り組んできたものにとって、公刊されつつある『黒ノート』の問題は頭が痛い。中身はほとんどが哲学メモだが、中に露骨なユダヤ差別的な記述が見られることで再び論争になっている。折しもフライブルク大学は、ハイデガーとその師フッサールがかつて占めた歴史ある哲学講座を解体するという「大学改革」案を出して、騒ぎを増幅させている。こうした騒々しい問題はひとまず措くとし

て、私の関心とするアナクロな（格好つけていえば「反時代的」な）話題を披露することで、自己紹介に代えたいと思う。

19世紀のオーストリアの作家シュティフター（Adalbert Stifter）に『曾祖父の遺稿』という作品がある。シュティフターはそれを病いの痛みにも耐えつつ、死の直前まで推敲を続けていたという。晩年のハイデガーに、この作品中のエピソードを解釈している短い論考がある（ハイデッガー全集13『思惟の経験から』創文社、235-248頁）。ある医者とその下僕が患者のもとに向かう途中で、冬の森を通り抜けようとした際に経験した異常な気象現象についてのものである。針葉樹の葉や枝にたまった冬の雨の水分が、地表付近の冷気により急速に凍って氷柱になり、その重さに耐え切れない樹々の枝が自然に折れて、森の中にその恐ろしい響きがこだまする。地元の村人はおろか、馬車を引く馬すらも恐ろしさため足踏みをするこの異常現象のエピソードについて、シュティフターは出版人に宛てて、この「氷の物語はきっと深く働きかけるにちがいない」と書き送っている（氷の物語ときいて、我々はあの愛すべき『水晶』のことも思い出さずにはいられない）。シュティフターがこの物語るべき出来事を端的に「もの das Ding」と表現していることにハイデガーは注目している。シュティフターは単にデモーニッシュな自然現象と、それに怯える人々の様子を文学的に物語ったのではない。異常な出来事がその「記号」となっている見えざる「法則」を「提示」することが、詩人シュティフターの役割である。ただし主人公の医者のように、自然科学的な啓蒙の論理（ロゴス）によってではな

い。詩人は言葉（ロゴス）において「働きかける」。ハイデガーの他所での言い方を用いるならば、詩人とは言葉による「もの」の「設立者 der Stifter（シュティフター）」であり、つまり、言葉の働き自体が自然（ピュシス）と通じているのである。

フライブルク大学総長としてナチス政権に加担した責任を問われ、戦後公職追放の憂き目にあったハイデガーのもとを、亡命先のアメリカからアレントが訪ねたのは1950年のことであった。しかしそれはハイデガーの妻エルフリーデとの気まずい対面でもあった。かつての不倫関係をなじられ、ユダヤ差別的な暴言まで浴びせられながらアレントは耐えたらしい。その忍耐をハイデガーはアレントに感謝している。その一ヶ月後、ハイデガーはアレントにシュティフターの『石灰石』からの抜き書きを送っている。それは清貧を貫くある老田舎司祭の物語であり、老司祭がただ一つ不相応に高級なリネンのシャツを恥じらいながらも身につけているのは、実は恋の思い出のためであった。不器用で生活力もなかった若者が、いつも真っ白なシャツを身につけていた洗濯娘に心惹かれて、彼女がリネンの衣類の良さを説くのに影響され、自分でも貯めたお小遣いから購入したものだそう。それ以上の発展があったわけではない。ただそれだけの淡い恋の思い出を抱えて、老司祭はいまや、貧しい教区に学校を建てべく、これまで切り詰めて貯めてきた一切を寄進して死んでいこうとしている。そして語り手に対して、仕舞い込んでいたリネン生地もお金に替えて寄進してくれと遺言するのであった。ハイデガーは抜き書きのあとに、アレントに向けて次のような短い言葉を添えている。「これほどおずおずと語られた愛の物語はほかにはありません。決して忘れないというその心やさしさが、これほど激しい力をふるった物語も。私は『石

灰石』を、おそらくきみがまだお母さんのおなかにいた1905年のクリスマス以来、毎年誕生日に読んでいます。」（『アレント＝ハイデガー往復書簡』みすず書房、65-66頁）

1905年といえばハイデガーがギムナジウムの生徒だった頃である。自らも慎ましい教会守の息子であったハイデガーは、この老司祭の生き方に感ずるところがあったのであろう。親しんできたこのささやかで偉大な「設立者（寄進者）der Stifter」の物語にハイデガーが立ち返ったとき、アレントへの思いとは別に、かつてドイツの「大学改革」と意気込んで、教育による新時代の「設立者」たらんとして挫折したことへの、割り切れない思いもくすぶっていたように思われる。

ハイデガーとアレントの関係についていえば、むしろシュティフターの大作『晩夏』のリーザハ男爵とマティルデのそれになぞらえたい気がする。盛夏をみるのがかなわなかった若い二人（住み込みの家庭教師とその教え子）の情熱が、晩夏の静かで落ち着いた光の中に、より高い次元でよみがえる。喪失を代償することなしには到達できない高み、というそのモチーフは、ハイデガーの存在の思想の基調をなすパトスそのものではなかつたらうか。神ならざる死すべきものには、「時が熟する」のを待つことができるだけなのである。そしてそのパトスは、やはりこの作品を愛したニーチェの反時代性にハイデガーを結びつけている。注目すべきは、この作品中に縷説されている芸術作品論の中に、ハイデガーのそれと見紛う部分があることである。そこから、シュティフターに対するハイデガーの親炙の程が窺われると私は考えている。